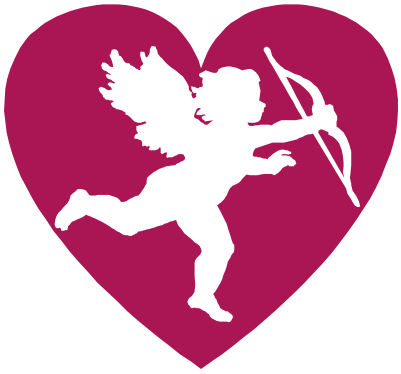
2002 Juvenile Cultural Society



目次

「児研生活を振り返る」……幹事長　坂　慎弥　5
「2002年度本部会計決算報告」……本部会計　山野辺　俊一　7
「回想・2002年夏合宿」……夏合宿委員長　高橋　志奈子　9
「夏合宿について」……廣澤　勇也　11
「来年につながる三田祭を」……三田祭委員長　村松　壮介　12
「初めての三田祭」……荒木　紀子　13
「春キャラを終えて」……春キャラバン委員長　稲見　優介　15
「春キャラバン」……町永　千春　17

【浅貝】
「一年間の浅貝を振り返って」……チーフ　土田　隆仁　19
「浅貝の大雪」……稲嶺　清志郎　21

【軍畑】
「これからいくさばた子ども会を創る皆さんへ」……チーフ　土屋　千尋　23
「いくさばた子ども会に入って」……小川　未樹　25

【新橋】
「新橋魂とともに」……チーフ　井上　直人　27
「東京タワーをみあげて」……高村　光太郎　29
報告　30

【童話会】
「二〇〇二年度童話会活動報告」・・・・・・・・・・・・・・・チーフ　萩原　玲　32
「2002年度童話会活動を通して」・・・・・・・・・・・・・・上野　明子　35
【文化財】
「2002年度　文化財パート活動報告」・・・・・・・・・チーフ　竹澤　洋子　38
「文化財体験談」・・・・・・・・・・・・・・・・服部　さくら　40
2002年度卒業生紹介　42
編集後記　45

2002年度　役職一覧

《四役》
幹事長・・・坂　慎弥
本部会計・・・山野辺　俊一
夏合宿委員長・・・高橋　志奈子
三田祭委員長・・・村松　壮介

《春キャラバン》
委員長・・・稲見　優介

《チーフ》
浅貝・・・土田　隆仁
軍畑・・・土屋　千尋
新橋・・・井上　直人
童話会・・・萩原　玲
文化財・・・竹澤　洋子

2002年度
活動報告

「児研生活を振り返る」

２００２年度幹事長　坂 慎弥

三年前。

入学式の日。

Ｏ先輩から児研のチラシを受け取る。

入学式の次の日。

塾生会館三階・児研ルームの扉をノックする。

Ｙ先輩から児研活動の紹介を受ける。

このようにして私の児研生活は始まりました。当時の楽しかった出来事は、三年という時間を経て[思い出]となってしまいました。今でも私は当時の出来事を色鮮やかに思い浮かべることができます。児研三年間を振り返りたいと思います。

児研生活で、私は様々な寄稿をさせて頂きました。（そして今回の機関紙 BON が最後の寄稿文となります。）それぞれ寄稿文には、自分なりのメッセージを織り交ぜてきました。それは、それぞれの時間での私が抱いていた児研への想いだと言えます。少しですが、再び紹介させていただきます。

・**2001 年度　オリエンパンフ**（オリエン委員長）

児研員のみんなとおしゃべりして知って下さい。

そのための パートであり ルームであり 児研なのです。

まずはルームの扉をたたいてください。

トビラを探し開いてください。

・**2001 年度　しおり**（オリエン委員長）

もう入学式がすんで 4 ヶ月たつけど、どう?

たくさんのことが変化してたんだけど知ってた?気付いてた?

→ 変化のうずの中心にいたのは 新しい君ら

※「しおり」は新入生同士の初めての共同作業による紹介冊子です。

・**2002 年度　オリエンパンフ**（幹事長）

みなさんのまわりの人に聞いてください

「どんな大人になりたいですか?」

「どんな子どもでいたいですか?」と。

・**2002 年度　しおり**（幹事長）

児研の活動をどう思いますか?

「ほかとはちょっと違う、大学生っぽくない」でしょうか?

私は「ほかとは少し違ったもの楽しめる自分」に

自信と信念をもって過ごし、今に至っていると思います。

・**2002 年度　三田祭パンフ**（幹事長）

数々の思い出に胸を熱くされていることと思います。

未熟な僕たち　にも、同じように思い出を創る事が

できるでしょうか？

過ぎ去った日々を懐かしく、

そしていとおしく感じる時が来るのでしょうか？

※「三田祭パンフ」は三田祭にいらしたOB・OG向けのパンフレットです。

・**2002 年度　機関紙 BON 第 46 号**（幹事長）

「児研がどれだけ好きか」を量るには、

「児研について どれだけ考えたことがあるか」が指標になる。

・**2003 年度　三田会ニュース**（前・幹事長）

児研が発展段階な団体であるからこそ、私は「大人になる」子どもでいることは何かという課題を教わることも、考えるチャンスを得ることもできました。

これらを読み返すと当時の気持ちが思い出されます。そして執行学年を終えて活動から離れた今、また別の想いが湧き出てきます。それは短いスパンでなく長いスパンを考えたからこそのものだと思います。

仲間と沢山の時間を共有する、これが児研で味わえる最もよいものではないでしょうか。そんな時間を共有することができれば、自分の中で何か(楽しい・辛いなどの気持ち)を作り出すことができるし、それは思い出にもなるはずです。児研は1サークル5パートという特別な構造です。そのため、様々な時間の共有ができるチャンスがあります。（パート活動はもちろんのこと、全体活動や他パートへのゲスト参加。そして各キャンパスにあるルーム。他にも沢山。）人それぞれの気持ち次第で充実を得ることができるのではないでしょうか。

幾度に渡る私の駄文にお付き合いいただきましてありがとうございました。OB・OG のみなさま、先輩方、後輩そして同学年のみんなとの時間の共有ができたことを心から感謝いたします。

最後にこの寄稿文での自分なりのメッセージを残したいと思います。

（今までに何度か書いたことがありますが、少しだけ修正します。）

卒業後でも仲間と

「ボクらはあんなことに悩んでいて、

あいつも一緒にあんなことに憤っていて・・・」

と愉快にお酒を酌み交わすことができたらいいなと願います。

ありがとうございました。

2002 年度本部会計決算報告

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越金	252,310	パート補助費	
部費	460,500	浅貝	78,000
大島・西澤記念基金	30,000	いくさばた	23,000
文連交付金	33,000	新橋	7,000
BON 売上（注 1）	87,800	童話会	35,000
受取利息	5	文化財	130,000
		夏合宿補助費	80,000
		三田祭補助費	110,000
		春キャラバン補助費	60,000
		記念品代	19,131
		ボランティア保険代	24,900
		BON 製作費	85,300
		雑費	11,214
		小計	**663,545**
		次年度繰越金	**200,070**
合計	**863,615**	**合計**	**863,615**

（単位：円）

（注１）　2001 年度 BON、2002 年度 BON の売上を今年度の BON の売上として、まとめて BON 売上として計上した。

2002 年度本部会計　山野辺俊一

全体活動

夏合宿・三田祭・春キャラバン

回想・２００２年夏合宿

夏合宿委員長　高橋志奈子

これを書いている現在、去年の合宿からもう一年近くが経っているということに改めて気付き、びっくりしました。そのことが信じられないくらい、あの三日間は濃かった……。今、わたしは原稿を書くにあたって、夏合宿の記憶をひっぱり起こしているところですが、どれもが鮮明で、ベタな表現ですがまるで昨日のことのよう。思い出に沿ってつれづれなるままに、あの合宿の記録を書き綴ってみたいと思います。

今回の合宿のコンセプトは、「児研員がこどもに戻れるような場を作りたい！」ということでした。そして、場所は委員長の個人的な好みで「海辺」に決定。こどもの夏休みといえば海です。海に決まってます。

２００２年７月３１日、日吉の銀杏並木を出発、バスで一路目的地に向かいます。行き先は静岡県賀茂郡賀茂村、温泉で有名な土肥町と西伊豆町の間にある小さな村でした。背後には山、目の前は海、その間を縫うようにして国道１３６号線が走っている、のどかな漁村。宿の窓からは港が見えました。

この合宿では、二泊三日でそれほど時間の余裕がないということもあり、企画よりも自由時間を多めにとりました（手抜きともいう）。初日は黄金崎公園での企画、花火、胆試し、二日目には海辺での企画を計画していましたが、なかなか予定通りに進まないことも多く、結局流れた企画もあったりして、計画が甘かったと反省。特に胆試し。急遽取りやめた理由は、宿の経営者のご夫妻いわく「このへんは夜になるとマムシとイノシシが出て危ないから」。そういうことは下見の時に教えて欲しかった。胆試し担当だった委員さん、あの時はごめんなさいでした。

そしてなにより今回の合宿のメインは海！でした。海辺で花火に海水浴。想像しただけでもわくわくしませんか？去年はそれが実現できちゃったのです。海辺で花火なんてもう青春！それに海水浴。一応、企画を考えておいたのですが、みんながあまりにも海に入りたそうにしていたので、こちらもつぶして自由時間にしてしまいました。こども会の崩壊ならぬ、おとな会の崩壊。それでも、まるでこどものようにはしゃいで、楽しそうに泳いだり水遊びしたりしているみんなの表情を見て、本当に来て良かったと思いました。ともかく、この一瞬だけでも、この合宿は大成功だったと、そう思えました。まさにこれが、私が夏合宿委員長として成し遂げたかったことなのですから。

お天気にも恵まれ、絶好の海水浴日和。海は空いていて、ほとんど児研員の貸し切り状態。遠浅で透明度の高いきれいな海でした。ただし、クラゲに刺された負傷者が大量に発生したことと、砂浜でなく砂利浜だったので裸足で歩くのは非常に辛か

ったことは、あまり思い出さないようにしておきます。

あと特筆すべきは、宿のご夫妻でしょう。特に奥さんの方。大変キャラの濃い方だったので、いろいろ忘れがたい思い出が出来ました。特に印象深いのは、夜の飲みで使う宴会場の使用をめぐって一悶着おこしたこと。私が強引に主張を通して、勝ったつもりでいたら、帰り際にしっかり場所代を請求されたなんていう甘酸っぱい思い出もありました。

二泊三日の旅程を終え、日吉に戻ってきたのは8月2日。大きな事故もなく、大きなトラブルもなく（小さいのは頻発でした）、無事に夏合宿が終えられたことも、至らないわたしに付いて来てくれた委員・参加者のみんなにも、感謝の気持ちでいっぱいです。半ば押付けるような形で引き受けてもらった夏合宿委員さんたちにはずいぶん迷惑をかけてしまいました。合宿の間、まったく余裕がなくおろおろしてばかりのわたしをそっとフォローしてくれた多くの方々、どうもありがとう。反省することだらけですが、夏合宿委員長をさせてもらえて本当に良かった。あの夏のことはずっと忘れません。

最後に、よくわかったこと。わたしがイベント系の幹事を務めるのはとても危険だということです。以上。

夏合宿について

文学部二年　廣澤　勇也

２００２年度夏合宿は二泊三日で、七月三十一日から八月二日にかけて行われた。当時一年生だった私は大学生としてはじめての夏合宿だったということに加え、御存知のとおり児童文化研究会は五つのパートに分かれていて、全体活動としてすべてのパート員が集まるという企画であるため、様々な期待を抱きながら当日日吉の集合場所へとむかった。今回は子ども会はないとのことだが、そのためほかの仲間たちと過ごせる機会がおおかったと思われる。

今回の場所は伊豆。海に近い旅館である。目的地にはバスで向かうのだがもうバスに乗った時点で夏合宿の企画は始まっている。車内でもいくつかのゲームを楽しみながら私たちは伊豆へと着いた。

宿に着き、荷物の整理などがすんだら、子供のようにはしゃぐ時間の始まりだ。私たちはこの合宿の間の企画はこどものときにしたこととなんら変わらないことを楽しむ。「童心に帰る」これこそがこの夏合宿のすべてのコンセプトではなかろうか。具体的には昼間はけいどろを少し発展させたようなもの、そして猛獣狩りなどを行った。

こんなことをするのはちょっぴり恥ずかしいかも知れない。なかには嫌がる大人もいるだろう。しかし私たちは「児童文化研究会」の一員。子供と多く接することでみな子供がどのようにたのしみ、遊んでいるのかをしっている。そんな無邪気な子供たちに一瞬もどることができるのは私たちの特権だ。みんなの笑顔が印象的だった。

さて昼間の活動がおわれば、今度は大人に戻る時間。夕食、入浴後は飲み会兼夜の企画がまっていた。一日の疲れを癒しながら、みんなで楽しくお酒を飲んだ。楽しい夜は延々と続き、日付が変わっても私たちの一日に終わりはこなかった。

さて翌朝。朝食を済ませれば海へと飛び出した。みんなが水着を持ってきているわけではない。しかしほとんどみんな海へと飛び込んでいった。海は私たちを童心に帰らせるには強力な触媒であった。再び子供の笑顔をみせながら時間はあっという間にすぎていった。また海で夜には花火も行った。毎年やる花火も海という場所、またこれだけ大勢でやるととても違って見えた。

また二日目のよるには大納会がある。各学年ごとに出し物をするのだが、これがなかなか決まらない。悪戦苦闘してようやく決まった出し物。だが、これを協力して決めることも私たちの学年の団結を深めたと思う。

このように私たちの二泊三日は一瞬の時を終え学び舎日吉へ戻る時間となってしまった。この時間がずっと続けばよいのになあ。と、各個人がおもっているのならば夏合宿は大成功だったのではないだろうか。

「来年につながる三田祭を」

前年度三田祭委員長　村松壮介

私が三田祭委員長になる時に言われたことで今でも覚えている言葉がある。

「児研の三田祭は真っ白なキャンパスのようなものだ。委員長が好きなように色を塗っていいんだよ。」と。

三田祭を実際に体験した私は、今となってこの言葉を完全に肯定することはできない。その理由は、三田祭委員長という立場になって始めて分かったことだ。児研の伝統の重みである。

三田祭には膨大な量の手続きがある。なにげなく毎年とっている１０７という教室も、無名のサークルが取ろうとしたらまず無理であろう。また、いつも中庭で使わせてもらっている場所も他のサークルから見たら羨ましいと思われるに違いない。しかし、児研という名前を出したとたん三田実から快く場所を提供してもらえる。毎年貰っている駄菓子やラムネ業者もそうだ。

「あ、児研さんね。今年もよろしくお願いします。」

初めて電話した業者の方にそういった声をかけてもらえる。どれだけそのおかげで手続きがスムーズにいったことであろう。それもすべて、今までの委員長を中心とした児研のメンバー達が残してくれた伝統の賜物である。

それから、私の三田祭に対する意識が少し変わった。今年だけを考えるのではなく、“来年につながる三田祭”を考え始めたのである。各ＪＯＢの委員長をほとんど二年生に任せたのもその意識の表れといえよう。しかし、三田祭をよりよくするためには、その伝統だけに頼ってはいけない。私という新たな足跡をそこに付け加えなくては委員長になった意味がないからだ。その表れとして発行したのが三田祭ＷＡＬＫＥＲである。三田祭の情報を定期的に児研員に提供するために作ったこの雑誌は大盛況・・・とまではいかなかったかもしれないが好意的な意見をたくさん聞くことができた。今年はこのような雑誌を発行するかどうかはわからないが、私としての足跡を残せたことにとても満足している。

私が去年の三田祭を自分で評価するとしたら、間違いなくこう答えるであろう。

「百点！」

私は決して自惚れているわけでもないし、反省点を全く見つけることをしない楽観主義者でもない。反省点は山ほどあるし、改善されるべき点はたくさんあることであろう。他の人が評価したらもしかしたら五十点ぐらいの三田祭だったかもしれない。ただ、あの三田祭中の児研員の生き生きとした顔や、来てくれた子供たちの楽しそうな顔を前に百点をどうしてもつけたくなる。彼らのあの顔を私が与えることのできた最高の顔だったと信じたいからだ。

今年もまた新たな三田祭がやってくる。きっと、私が塗った色とはまったく違う色を今度の新委員長は塗ることだろう。伝統という色がたっぷりと染み込んだそのキャンパスに・・・。

初めての三田祭

二年　荒木紀子

「駄菓子いかがですか～？ラムネもありますよ～」
たくさんの人であふれかえっている三田キャンパス。その熱気に負けないように、自分も声を張り上げて駄菓子屋の店番をしていた。

二〇〇二年、十一月。私にとって初めての三田祭。それは中学、高校の文化祭とは明らかに異なる学園祭。竹中平蔵、鳩山由紀夫氏の公演や、相川七瀬のライブなど、有名人による催し物や、ミス慶應コンテストなどがおこなわれ、本当にビッグな学園祭であった。私達は、十月後半辺りから本格的な準備を始めていたのだが、三田祭が始まる前までは具体的なことが何もわからず、いささか不安もあった。しかし、いざ始まってみると、そんなものはすぐになくなった。…というか、そんなことを考える暇もなかったのだ。それほど毎日が充実していて、とにかくすごく楽しかった。

其ノ一、駄菓子テント

私の三田祭での仕事のうち、一番多かったのは駄菓子テントの仕事だった。うまい棒、ふがし、水あめ、キャベツ太郎…と、おいしそうな駄菓子がいっぱい並ぶ駄菓子の店。お客さんがいない時は、店員自ら買ってみんなで食べていた。駄菓子は手ごろな値段でいっぱい買えるとあって、客層は子どもから大人まで様々だ。時々、かなり年配の方も、懐かしんで楽しそうに見てくださっていたのが印象的だった。

其ノニ、ちんどん屋

昨年は猫と、手作りの力作であるたまちゃん（あごひげあざらし）の着ぐるみを使ってキャンパスをねり歩き、ちんどん屋として、児研の宣伝をしていた。よく、遊園地などで着ぐるみは見かけるのだが、実際に自分で着てみたのは初めてで、なかなか面白かった。思ったより重くてうまく動けず、中はとても蒸し暑かった。自分は目の前の人が誰だか分かっているのに、相手は自分が誰なのか分かっていない。しかし、歩いていて私が手を振ると振り返してくれたり、一緒に写真を撮ってほしいと言われたりしたのがとても嬉しかった。小中学生には少しいじめ（というか暴行？）にあったが、ちびっ子と握手したりして、「後楽園で君と握手！」するお兄さんになったようで、とても面白い体験をすることができた。

其ノ三、三田祭公演

文化財員による三田祭公演は、影絵劇では「モモ」を、人形劇では「モリスと不思議ながちょう」を公演した。
影絵劇の方は、オリエン公演や夏キャラのリハーサルなど、それまでに何度か見る機会があったのだが、よく通る声と背景の色使いがとてもきれいですばらしかった。劇を見に来てくれた女子高の後輩達も

「すごくよかったです！」と大絶賛してくれていた。
そして人形劇の方は、見るのはまったくの初めてだったのだが、人形の細かい動きがよく研究されていて、本当にテレビでやっているのをそのまま生で見ているような新鮮な驚きがあった。
三田祭公演に限らず、文化財員はいつも何かの公演の準備で練習、練習、また練習の繰り返しのようなので大変そうだなぁと思うが、練習して、努力した成果がしっかりあらわれていて、見る人に感動を与えられるところがすごいと思う。

其ノ四、紙芝居&童話の森

私は童話会の作品を、普段見る機会はないのだが、三田祭中は、紙芝居「月と地球」という作品を見ることができた。子どもたちを前にして、軽快に拍子木を打ちながら物語を語る童話会員は、まさに「紙芝居屋さん」という感じで、気がつくと私は、周りのちびっ子たちとまざって、夢中になって聞いていた。文化財の公演と同様に、見る人をひきつけるパワーを感じた。また、三田祭中に販売された「童話の森」の作品を読んで、それは日々のパート活動の成果だと思うが、次々といろいろなテーマで童話を書ける発想力がすごいと思った。
駄菓子の店は、子どもから大人にまで愛される。そして、三田祭公演、紙芝居、ちんどん屋に子ども会（私は昨年は参加しなかったが）は、見る人に夢を与えたり、子どもたちを楽しませたりすることができる。これら全ての活動がとても児研らしく、児研にぴったりだと感じた。そして、その活動に一生懸命になれる自分自身が確かにそこにいて、本当に毎日が充実したものになったと思う。
また、いつも三田にいる先輩や、普段は会えない他パートの人達と会って話したりできたのが楽しかった。やはり児研は五パート集まって一つなので、普段は活動が違っていても、この三田祭という全体活動を通して、新たな「つながり」を感じることができた。
時がたつのは早いもので、私がこの「始めての三田祭」を過ごしてからもうすぐ半年が経過しようとしている。昨年私達が入ってきたのと同じように、今年もまた新しく一年生が児研の一員として加わった。この新緑の銀杏並木が黄金色に色づくころ、またその行事はやってくる。
児研のみんなが一つになる行事―三田祭。これからもこの大事な全体活動を大切にしていきたいと思う。そして今年「初めての三田祭」を迎える一年生に、この「児研らしい三田祭」を受け継いでいってほしいと思う。

春キャラを終えて

機関誌『BON』をご覧のみなさま、こんにちは！私は、２００２年度春キャラバン委員長をやらせていただきました、現ＯＢ１年の稲見優介（いなみゆうすけ）と申します。新入生のみなさん、はじめまして。今後ともよろしくお願いします。原稿の依頼を頂き、何を書いたら良いのか？非常に迷った（たくさんありすぎて）のですが、できるだけ春キャラ参加できなかった方が読んでも分かるように書こうと思います。そして少しでも興味を持たれた方は、是非、今年の春キャラに参加してみてください！！

今回の春キャラは、静岡県富士郡芝川町（各自地図参照）において２００３年3月2日～7日まで行いました。小学校は4校でした。キャラバン公演は、小学校の授業の一環として行われる為、キャラバンを行うにあたっては、まず地元の教育委員会や各小学校と交渉し、活動を許可していただく必要があるのですが、これが非常に難しいのです！特に、「ゆとり教育」の動きの中で、授業時間や授業内容が大きく変化していて、私達の劇を観る時間を割くことが非常に困難になっているのが現状のようです。実際、交渉を進める中で、現場の先生方は、キャラバン活動に好意的な方が多いのですが、授業時間の削減は私達学生が考える以上に、先生方にとっては深刻な問題のようです。このような状況の中で、私達の活動に理解を示して下さった芝川町の皆様には心から感謝です！！

肝心の劇についてですが、人形劇（低学年向き）『リンネの落し物』演出：石川健太、影絵劇（高学年向き）『孫悟児』演出：早水慎一の２本立てで行いました。今回は、例年に比べ、キャスト参加者が少ないという不安がありましたが（演出家除き１４名）、練習を進める中で、メンバー全体の連帯感がいつも以上に高まり（途中で鍋会なども行いました）、ひとりひとりが高い目標に向かって努力をし続けてくれたおかげで、人数の少なさの問題は、あまり苦にならなかったような気がしました。とりわけ、文化財員以外からのキャスト参加として、高村君と町永さんが来てくれたことや、多くのゲスト参加者が来てくれた事は、私達にとって、非常に心強かったと思います。春キャラは、全体活動であるので、今後もいろんなパートの方に、積極的に参加してほしいと思います。

キャラバン先では、毎朝６時に起床し、午前中に人形劇・影絵劇の公演を行ない、昼は各教室で給食をいただき、お昼休みを一緒に過ごし、その後、次の公演先の小学校で舞台設営をして・・・という毎日です。子供達と給食を食べ、昼休みを共に過ごすという事は、キャラバンの大きな特徴であり、なかなか貴重な体験だと思います。大学生と触れ合う機会などほとんどないためか、最初は、人見知りがちな子も多いですが、昼休みになる頃には、打ち解けていました。同じ町でも、小学校によって、子供達の反応も様々です。また、小学校から送られる劇の感想文には、私達でさえ気が付かないような面白い視点からの感想などもあり、私達も楽しく読ませてもらっていました。キャ

ラバン期間中は、朝も早く、毎日の舞台設営など、肉体的にもハードで単調な毎日のように思われますが、最高の公演を行うには妥協のできない作業です。その代わりに私達が得ることができる、やりがいの大きさは、言葉で言い尽くせないものがありました。

以上、今回の春キャラを振り返って書いてみましたが、先ほども述べたとおり、参加者ひとりひとりが、自分なりの高い目的意識を持って参加していたので、無事成功したのだと思います。キャスト参加者、ゲスト参加者全員が、公演時だけでなく、給食や昼休み、また設営時に、積極的に自分の役割を果たしてくれました。確かに、全てが順調だったわけではなく、今後への課題も残りましたが、それらを自分達で反省し、同じ失敗を繰り返さないよう、後輩のみなさんにはがんばってもらいたいと思います。

最後になりますが、演出家としてみんなを引っ張っていってくれた二人には、この場を借りて改めて御礼をしたいと思います。お疲れ様！ありがとう！

２００３年５月５日

２００２年度春キャラ委員長　稲見 優介

春キャラバン

町永千春

２００３年、３月２日～７日という６日間の日程で、春キャラバンが行われました。演目は人形劇「リンネの落とし物」と、影絵劇「孫悟空」。静岡県の芝川町というところで、これらふたつの公演を行いました。芝川町は本当に富士山に近く、山と自然に囲まれたきれいな町でした。

私は今回、ゲストとしてキャスト参加させていただきました。そのため、文化財のことに関して何もわからない状態からのスタートでしたがいろいろな人たちから丁寧に教えていただきました。そしてそのぶん、練習期間からすべてのことが新鮮でした。人形など本当に全部が手作りであること、実際の練習など、文化財っていつもこんな風にやっているんだなあと思いながら参加していました。そのなかで意外だったこと、驚いたこと、感心したこともたくさんありました。

６日間のキャラバンは、行く前はとても長く感じていたけれど、始まってしまえば実にあっという間に過ぎた６日間でした。中４日で１日１校ずつ、４校の小学校をまわり、公演を行いました。その小学校も４校それぞれが個性的でした。こんな風に、一度に何校もの小学校へ行くという体験は滅多にないことなので、小学校の様子はとても印象的だったのです。学校によって子供たちは元気いっぱいだったりおとなしかったり差はありましたが、子供の勢いには圧倒されるものがありました。特に低学年の子供たちはびっくりするほど元気で、自分が小学生のときもこんな風だっただろうかと思いました。

１日１校ずつということは、毎日公演環境も変わります。そのため毎公演違う気持ちでのぞむことができました。さすがに初日は緊張しましたが、全体的にとても楽しく演じることができました。公演直前、観客の気配を感じながら待機している、あの独特の緊張感がとても好きです。そして何より、劇を見てくれた子供たちが書いてくれた感想文を見るのがとても楽しみでした。それぞれの言葉でいっしょうけんめい書いてくれて、劇のテーマが伝わっていたり、自分の役に触れていてくれたりするのを読むと嬉しくなりました。感想を読んでいて感じたことは、こちらが創っているのはひとつの世界であっても、子供はそれをひとりひとり自分で感じたように世界を創りなおしているんだなということです。

この春キャラバンは何もかも初めてのことだったので、とても楽しく、得たものも多かったと思います。文化財の活動を少しでも体験することができたし、普段関わる機会の少ない人たちとも一緒に活動して関われたのが何より良かったと思います。春キャラに参加しなければあまり関わることもなかったかもしれません。練習期間からキャラバン本番まで、とても貴重な体験をすることができて、充実した春休みでした。

浅貝
子ども会

一年間の浅貝を振り返って

２００２年度浅貝チーフ　土田　隆仁

私の代の浅貝の特徴は、何よりも子どもの多さだったと思います。通常浅貝子ども会では、スポーツ安全保険の支払いがあるため、４月の子どもの数が一番多くなります。普段は、１０名から１５名程度なのですが、４月には３０名を越えて、なかなか子供会に来てくれないような子どもたちまで参加してくれます。

昨年も、４月に３０名を越し、いつもの事だと思っていました。しかし、５月・６月になっても子どもの人数は減らず、毎回３０名近くの子供達が参加してくれました。これは、私達にとって大変喜ばしい事でもあり、また同時に、来てくれる子どもたちの期待を裏切れないという、良い意味でのプレッシャーにもなりました。

私が一年間、子ども会を企画していく上で取り組んだことは、今までやった事がないような企画を作っていこうということでした。その主な例として、「シャボン玉作り」と「絞り染め」を挙げたいと思います。

○シャボン玉作り

（内容）

シャボン液として、洗剤や石鹸だけでなく小麦粉や片栗粉、ごま油、食紅など色々なものを混ぜて、どういうシャボン玉ができるか挑戦した。またシャボン玉を作る道具も自分たちで針金を使って作り、色々な形で試した。

（当日の状況）

子ども達は、シャボン玉を作るよりも、色々混ぜて調合するほうに熱中し、世にも恐ろしい液体が数多く生成された。しかし、なぜか出来上がった液体でシャボン玉を作ると、凄まじく丈夫なシャボン玉ができ、手で持ってもぜんぜん割れなかった。

○絞り染め

（内容）

身近に生えている草花を取ってきて、それを煮出し、所々しぼった布を入れて、色をつける。また、同時進行で、たまねぎの煮汁でも同様の事を行った。

（当日の状況）

ここでも子ども達は、調合にはまっていました。男の子達は、草花だけに留まらず、きのこや木の枝、謎の生物の屍骸等、黒魔術の鍋のようになってしまいました。しかし完成品は、意外ときれいにでき、女の子たちは喜んで持って帰ってくれました。男の子達は・・・、想像におまかせいたします。

このように、今までにやった事がないような子ども会、子ども会じゃなければできないような企画というものを常に意識して活動を行ってきたつもりです。

また、企画を作る人間の努力あってこその結果であるとも思います。同学や後輩はもちろん、当時四年生だった方々や、ゲストに来てくれた人達など、たくさんの協力があってこそ一年間活動を行う事ができましたし、またたくさんの子ども達が参加してくれたのだと思います。

これからは私も、みなさんが色々と助けてくれたように、現チーフである早水君の力になれるよう努力していきたいと思います。

浅貝の大雪

浅貝パート員　稲頭清志郎

「国境の長いトンネルを抜けると、そこは・・・」

雪国だった。

二〇〇二年も暮れ切る間際の十二月、新潟は近年まれに見る大雪に見舞われた。

そのときぼくは浅貝こども会に参加するのは二度目だったが、「冬の」浅貝を見るのは初めてだった。越後湯沢の駅からバスに乗り三国山荘へと向かう途中、だんだんと雪意外何も見えなくなっていく窓の外を見ながら、この世にはちょっと笑いたくなるほど雪が積もっちゃうことってあるんだなぁ、と悟った。

一歩足を踏み出すごとに腿の辺りまでずぶずぶ雪に埋まってしまうようなところが、日本の、しかも自分の家からわずか一〇〇キロの場所にあるのは驚きだった。その昔、冬の浅貝にスキーウェア無しで参戦した先輩がいたという話を聞いたときはもっと驚いたが。なぜ名誉の凍死を遂げずに済んだのだろう。

それだけ雪が積もっていて寒いのだから少しは縮こまっていればいいのに、それでもやっぱり浅貝の子どもたちは元気だった。顔をあわせてまず、挨拶を交わすよりも前に拳を交わそうとしてくるのも相変わらずだった。戦闘力はむしろ9月に会ったときよりもあがっている気さえした。

その時にぼくはわかった気がした、何故にこんなにも浅貝のこどもたちはパワフルなのか、ということが。

雪国というとそれまで、深々と降り積もる雪に押しつぶされそうな家の中で人も猫もコタツで丸くなっている、というイメージしかなかったが、それは間違いである。雪国で雪や寒さに押しつぶされないように生きていくためには、猫になるよりはむしろ庭駆け回る犬のようにたくましくならなければならないのだ。

ぼくは忘れない。こどもを先輩と一緒に家に送っていったときのこと。そのこに「近道だから」と言われるままについていった先に待っていたのは、近道どころかとても道と呼べるようなところではなく、腰上までつかってしまうような人気のない雪野原だった。もしもその子だけなら確実に頭まで埋まって冷凍マグロみたいになっていただろう。

幸いにも先輩が体を張って雪を掻き分け道を作ってくれたおかげで文字通り窮地を脱することができたが、直線二〇メートルもない距離に十五分くらいかかった。ようやく舗装された道路の上に立ったとき、そのこはぽろりと一言、「雪が積もってなければ近道だったんだけどなぁ」と言った。

ひとを窮地に誘い込んでおいて「雪が積もってなければ近道」と断言して済ましてしまう浅貝の子どもはやっぱりパワフルだ。というかタフだ。これだから浅貝はやめられない。

いくさばた
子ども会

これからいくさばた子ども会を創る皆さんへ

～２００２年度いくさばた子ども会活動報告～

２００２年度いくさばた子ども会チーフ　土屋千尋

２００２年度は、大きな変動から始まりました。活動受け入れ先の児童養護施設、品川景徳学園の大規模な組織改革があった為窓口となって頂いていた係長が異動、新しい係長と、ボランティアの活動も一から組み直すこととなったのです。さらに新しい係長が着任なさったのは４月であった為、新入生に勧誘・活動説明をしながら、それに並行して活動の土台について学園と話し合う、というなんとも情けない順序になってしまいました。ともあれ、「これまでと同じ活動をして頂けるようにしますから」という係長のお言葉にも助けられ、次のような活動方式に決定しました。

・活動は毎週土曜日午後３時半から午後９時まで（子どもたちとの夕食を挟む。終了時刻は各人により異なる）を基本とする↓昨年度までと同じ。

・パート員１人が子ども１人の担当につき、夕食後子どもに合わせた学習指導を行なう。↓昨年度までと同じ。

・１回の活動ごとに日吉～旗の台間の往復交通費を支給する↓２０００年度から停止していた制度の復活。

・学園での夕食１回につき、３６５円の食費を学園に支払う。↓新しい制度。

・各パート員が学園で夕食を頂く日を、１か月分まとめて前月にチーフが学園に申告する。↓昨年度までは各週、２日前までに個人申告。

・子ども会など、各企画の際に企画書を提出↓新しい制度。

さらに今年度一番の変化として、「ボランティアは必要だが、ボランティア全員が夕食をとるスペースが確保できない」という意見の出た部屋（景徳学園は小舎制をとっている為、５０人程度の子どもが６つの部屋に分かれて生活しています）に関して、夕食の時のみ、部屋で食事を取れないパート員が学園外で食事を済ますという外食制度ができました。（外食に関しては先に述べた交通費から食費を差し引いた残りから、一食につき５００円をパートから支給しました。）ただし、これは一部のパート員だけが活動途中に外に出なければならず、一部のパート員への負担・活動のけじめなど問題も提出されました。２００２年度に関しては暫定的な制度として取り入れましたが、今後に関してはまたパートで話し合って頂きたい制度です。

今年度の人数・担当の配分は、パート員１５名（男子７名女子８名）の内、小学生担当が２名・中学生担当が１３名（特に中３担当が４名）でした。学園からの要望として、中学生、特に３年生の受験指導があった為です。小学生に関しては学園からそれぞれの理由で特別に学習に力を入れたいという要望があった為担当がつきました。外食は２部屋・合計５人の内、毎回３人（交代制）が対象でした。

今年度行なった企画についても報告させて頂きます。今年度は、春秋２回の子ども会企画、冬の文化財公演企画を行いました。

・春子ども会企画↓「けいとく祭」オリエンテーリング形式で、学園敷地内に配置したゲームをクリアする毎に「おみこしの部品」を手に入れられる。最後にチームごとに「おみこし」を作り、飾り付ける。

・秋子ども会企画↓「けいとく大運動会」運動会をイメージした種目で２チームが対戦する。

・文化財公演↓文化財パートに依頼し、人形劇「モリスと不思議なガチョウ」を学園内で公演。その後いくさばた主導で子ども会を行なった。

尚、昨年度まで行なっていた三田祭への子どもたちの招待は、人数的な制限などを考慮した結果今年度は見送りました。

事務的な報告は以上です。ここからは、活動を退いた人間の、蛇足に近い文章ですが、中心から離れなければ見えないものもあります。これが、これからいくさばた子ども会、児童文化研究会で活動をしていく皆さんへの小さなヒントにでもなれば幸いです。

いくさばた子ども会のパート員を見て感じるのは、パート員それぞれに「哲学」があるということです。私から見たら驚くような事をしているパート員でも、よく話を聞けば、そこには必ずしっかりした理由がありました。子どもに裏表のある自分を見せたくないから態度は変えない、常に真剣に対等に子どもに接したいから大人ぶらないようにしているなど…皆が「個」として子ども達と接している証拠だと思います。でも、惜しむらくは他の人のそれを聞く機会が少ない点。反省会とか、堅苦しい場だと皆「熱」を隠してしまいます。現に先に挙げた「哲学」も、帰りの電車の中や、酒のコップを片手にたまたま聞けたものばかり。もっと、ちょっとした時にも自分の「子ども論」「たばさ論」を熱く語っても、別にかっこ悪くないのにな。そんな風に思います。ぜひ、泥臭く議論することをお勧めします。

そして子ども達と接していて、私が、学園の子どもは学園以外にも世界を持っている(学校や両親など)、という当たり前の事を忘れがちなことに最近気づきました。多分皆も、頭で理解していても具体的なイメージを持ってはいないと思います。同じように子ども達も、私達が、学園の外では未熟な「今時の若者」で学生で、親がいて…なんて考えていないのです。それでどんな行動をするかは、皆さんの自由。自分も子どもに近いんだよってわかってもらうのもよし、「大人」と思われているのだから、しっかりした態度をとるのもよし。でも、子ども達にとって私達は「学園にやってくる大人」っていうイメージなんだっていうことは覚えておいた方がいい、そう思うのです。逆にいえば職員の方にとって私達は「時々やってくるだけの学生（＝子ども）」なんだ、ということ、職員の信用を勝ち取るのは、皆の活動と実績しかないんだってことも忘れずに。

また、チーフとしての自分を振り返ると、1年生に対して「導く」ことをあまりしませんでした。私がそうであったように、1年生には自由に活動する中で、子どもと触れ合ったり上級生に相談しながら、ゆっくり自分なりの哲学を作ってもらいたかったからです。ある意味一番厳しい方法でしたが、皆のびのびと、自分で物を考えられる土台を作り上げてくれたようで、嬉しくてたまりません。そして2年生には、様々な場面で責任者やサポートをお願いし、チーフの仕事全部をオープンにして覚えてもらえるように、と考えていましたが、それどころか私の方を導かんばかりに助けてもらいました。3年生に関しては敢えて細かく挙げません。いつも的確なアドバイスをくれる皆でした。

最後に、これからばりばり活躍されるみなさんへ。

さっき長々と書いたような「昔の制度」「昔の人間の考え方」を知って、そこからどんどん新しいモノを創って下さい。そしてそれをまたしっかり記して、次の人達へのはなむけにして下さい。子ども達との関わり方にマニュアルがない分、未来の児研員が迷ったときの材料を、たくさん残してやって下さい。

この活動はすごい活動です。みなさんが自信とプライドと、やわらかな感性をなくさず活動してくれることを望みます。

いくさばた子ども会に入って

小川　未樹

いくさばた子ども会は、毎週土曜日に都内にある児童養護施設へ行って、そこに住む子どもたちと遊んだり勉強を教えたりするパートだ。ここはひとつの大きな家のような場所になっていて、子どもも幼稚園から高校生までいろんな年代の子がいっしょに暮らしている。たばさに来ると、私もその大きな「家」の一部になりそこに溶け込んでいくような気持ちになって、不思議な温かさが感じられる。だから、外で子どもと遊んで、夕方部屋に帰ってくるとき、私はつい「ただいまー。」という言葉が出てきてしまう。ここで育つ子どもたちといっしょに、私もこの活動のなかで、自分の中の何かを育てていきたい。

あまり学習ボランティアという名前にとらわれずに、子どもたちのお兄さんお姉さんになってほしい。」

私がいくさばたパートに入ったきっかけは、説明会のときに施設側の先生がおっしゃったこの言葉だ。末っ子の私は、「お姉さん」という響きにとても魅かれてしまった。

私も誰かの役にたてるのかもしれない。）

ふと浮かんだそんな思いで、私はたばさへの入パートを決めた。

担当の子と関係をつくっていくなかで、迷うことや、自分の言葉・行動に後悔してしまうことはたくさんあった。一人の子どもとじっくり向き合う、ということは思っていた以上に難しくて、責任もある。自分には無理だ、と考えることも何度もあった。けれど、土曜日になって、たばさに来れば、そんな私の弱気は担当の子やいっしょに遊ぶたばさっ子、そして「たばさ」という場所の温かさにいつのまにか消されてしまうのだ。担当の子の素直な優しさや、勉強を頑張っている姿、何よりも私という人間を受け入れてくれることを、私はかけがえのないものだと感じる。私は優秀な家庭教師ではないし、カウンセラーでもない。だめなところもいっぱいあって、完成した人間ではない。「どう接すればベストなんだろう」「知識も経験もない私に何をしてあげることができるんだろう？」と考えはじめると、うつむいて沈み込んでしまいそうになる。けれど、子どもが私のほうを向いていてくれるのだから、下を向いていてはだめだ、と思う。いつか先輩が言っていた、「いっしょにいることだけで子どもは何かを感じてくれるし、その子にとって何か意味のあるものになっている。」という言葉を私は信じたい。そして、担当の子に自分ができる最大のことをしたいと思う。そのために私は、毎週土曜日、午後から夜までという時間を使って、いくさばた子ども会を続けている。

新橋
子ども会

新橋魂とともに

２００２年度チーフ　商学部４年　井上尚人二等兵

２００２年１２月２１日土曜日、この日は土曜日には珍しく雨でした。この日をもって、私の一年間のチーフ任期が終了し、現チーフである佐野三等兵へのバトンタッチとなりました。おそらく、この日だけは天の神様までも雨という涙を流して祝福してくれたのでしょう。私は自他ともに認める晴れ男です。私がチーフになってしまったために、土曜日に雨が降ることがなくなり、新橋の活動が毎週必ず行なわれるはめになってしまったということです。パート員たちは常々、「たまには休みが欲しいです。」なんて口々に言いながらも、毎週の活動にみんな精一杯勤しんでくれました。ありがとね。

新橋パートというところは児研のみんなの間では一体どのように思われてきたのでしょうか。新橋パートを形容する言葉として、よく「児研のセーフティーネット」だとか、「児研のパレスチナ」などといった言葉を耳にしたことがあります（「児研のアルカイダ」なんて表現もありました…超苦笑）。いい意味で使われているのか、悪い意味で使われているのかはわかりませんが、私はあえてここでは、いい意味に理解し、そんなパートの代表ができたことを誇りに思いたいと考えます。

というのは、まず、他パートから新橋パートに移ってきてくれた者が今まで何人かおりました。これをよく、「新橋は受け皿だ。」といった表現でとらわれます。しかし、中にはさまざまな事情で今まで入っていたパートを続けられなくなったけど、「でも児研は好きだから、何とか残りたい」と思ってくれる者もいることと思います。そんなとき、「じゃあよかったら、うちにおいでよ」と言ってくれるくらいの寛容さがあるパートがあってもいいんじゃないでしょうか。そういった者に再チャンスを与えることで、お互いを思いやる気持ちも生まれることと思います。

また、新橋パートには実に忙しい者が大勢おります。と言うのも、多くのパート員が、兼サークル、Ｗスクール、アルバイト…etc、などと掛け持ちしています。土曜日の時間をすべて新橋パートの活動のみに捧げるというわけには、なかなかいかないようです。でもそんな彼らのほうが、限られた時間をうまく使って、最大限に新橋を思い、楽しんでくれているようです。「子供たちのため、いい加減なことはできない」と言う気持ちで、一生懸命に活動を盛り上げてくれています。「やるときはやる」「ダラダラ活動するのではなく、たとえ短い時間でも内容を濃く」と言ったメリハリのあるパート員が多かったことに、何より私自身とても嬉しく、そして助けられました。チーフとしてみんなにわかってほしかったこと、それは、「決して自分のことだけを考えるのではなく、子供たちや仲間を思いやれる気持ちと余裕さを持ってほしい」と言うことでした。すべてがこの一年で伝わったかどうかはわかりませんが、今後も忘れないでいてほしいと思います。

チーフをやり終えて真っ先に思ったこと、一つ目は、一年間みんな

大したケガもなく無事終わってよかったこと。子ども（しかも女の子）から毎回のように暴行を受けて、しょっちゅう流血していた男子大学生もおりましたが、こんなものは御愛嬌のうちで、むしろ本人にとっては良いネタになったことでしょう。おかげさまで、救急車を呼ぶこともありませんでしたね。活動中も活動後も。二つ目は、新チーフに佐野君が当選したこと。別に、選挙前予測では不信任者が優勢な勢いだったとか、その場の浮動票によって当落が変わる勢いであったということでは決してございませんが、世代間の交代という節目の時に、新しい代表者が皆の前で施政方針をはっきり述べ、皆を納得させた上で任務を遂行するという制度は民主主義の極みともいえ、独裁に喘ぐ近隣某国家においても是非とも取り入れていただきたいものであります。

最後になりましたが、パート員の皆さん、一年間ついてきてくれてありがとうございました。君たちと一緒に活動ができたことで、私自身一回りも二回りも大きな人間なれたような気がします。（ウエストも大きくなりました。）君たちはよく、私のことを暴君チーフなどと言ってきましたが、今思うと、こんなに優しかったチーフは今までいたんだろうかと考えています…冷笑。

何はともあれ、ありがとう。そして、佐野君はじめ下級生のみんな、これからも新橋を頼んだよ。

東京タワーを見上げて

高村

そもそも大学に入ってから自分がそんなことをするなんて思いもしなかった。そろそろティーンエイジャーを脱しようかという年の自分が、まだティーンにも達していない小学生といっしょに、校庭で遊ぶなんてことは。

「ボランティア」。今日の現代社会では美徳としてもてはやされているこの活動を、大学に入る前はどうしても好きになれなかった。批判を受けるのを承知で言うが、この言葉にはある種偽善的なイメージが常につきまとっている気がしたからだ。そこには常に自己犠牲的なニュアンスが含まれ、本来結果として評価されるべきものがその外観だけで評価を受けるという風潮が世に広まりつつある。

しかし。先人というのはかくも偉大な言葉を残してくれたのだ。「百聞は一見に如かず」。少なくともこの「新橋」というパートの活動においては、どこにも偽善的な要素は見当たらなかった。それどころか、もちろん子供に楽しんでもらうというのは第一目的ではあるが、それと同じぐらい「自分が楽しむ」というのが活動の上で重要な要素であるに違いない。

狭くて下が土ではない校庭。小さいボール。低いバスケットゴール。そして間近にそびえ立つ東京タワー。これらは都会的なイメージをふりまきながらも、どこかノスタルジックな気分を感じさせてくれる。その中で行われる野球、サッカー、鬼ごっこ、縄跳び、一輪車などの数々の遊び。まさに小学生の遊びの「王道」。だがこれらの遊びは同時に、大学生もともに楽しめるほどの普遍性を備えているとも言えるだろう。さすがにある程度の手加減があったりなかったりするのは愛嬌だが、決して「遊んであげている」のではなく、「遊んでいる」状況に自分があるというのが、ある種の驚きであった。

また、小学生は遊びに対して常に本気である。それは大学生の「まあ軽い運動になるだろう」的な考えをいとも簡単に打ち砕くのだ。走らされ、ボールを追わされ、また走らされ。疲れを知らない子供たちにはリゲインは不要、日頃から疲れ気味の大学生には適度な休息と癒しが必要というわけで、小学生と世間話をするのもまた楽しみの一つなのだが、そこでドラゴンボールやスラムダンクを知らないと言われてジェネレーションギャップを肌で感じたのも今となっては良い思い出である。

そして活動をしていて何より嬉しかったのは、帰り際に「また遊ぼうね（意訳）」と子供たちが言ってくれたときである。サークルだとかボランティアだとかそういったものは一切関係なく、「また来週も来よう」という気持ちにさせてくれるからだ。そこはかとなく夕暮れに近づくそんなときの御成門小学校は優しさに満ちている、と書けば文学的な感じがしないでもないが、本当に何かほのぼのとしたものを感じる。BGMは「少年時代」。新橋に入ってよかった、と心から思える瞬間である。

２００３年3月１９日

報告

慶應義塾大学　児童文化研究会　新橋子ども会は、２０００年度までに港区教育委員会から頂いた謝礼・１，９４０，０００円を、財団法人　日本ユニセフ協会に寄付したことを報告します。

２００１年度　新橋子ども会チーフ
神戸　舞
090-4200-5680
mai_kmb@2003.jukuin.keio.ac.jp

童話会

二〇〇二年度童話会活動報告

文学部四回生　萩原　玲

今年もＢＯＮの季節がやってきました。ＢＯＮ，ＢＯＮ，ＢＯＮ。編集長は大変そうですね。わたしみたいに原稿遅れる人がいるから。

昨年度（二〇〇二年度）の活動報告を、ということで、昨年一年間の活動を振り返ってみました。昨年度のＢＯＮも読み返してみました。いろいろ偉そうなことをいっている現役(当時)童話会チーフがいました。ああはずかしい。

二〇〇二年度は三年生六名、二年生三名、一年生四名と、若干あたまでっかちな形でスタートしました。

活動内容は前期に即興作文や合評会、後期に紙芝居と童話の森製作という基本スタイルを変えずに行いました。大きく変えた点は、例年八月に矢上小で行っていた読み聞かせ企画を、六月に慶応幼稚舎で行ったこと。それと九月に行っていた一日合評会を、一泊合宿という形に変更して行ったこと。この二点だけです。

幼稚舎での読み聞かせ企画は当初六月と十二月の二回を予定していたのですが、なんだかんだといって十二月は立ち消えになってしまい（ここらへんがチーフの要領の悪さというかいっぱいいっぱいさというか）、すこし残念な結果となってしまいましたが、個人的には幼稚舎のもつ小学校としては膨大な蔵書、広い図書スペースを何らかの形で生かせたら、というかねてからの希望をわずかながらかなえられ、とても満足しました。自己満足ですが。

九月の合宿に関しては、「童話会でも旅行をしたい！」というパート員(主に三年生)の意見を重視し、なるべく多くのパート員が参加できる日程で箱根に旅行をしました。運がいいと言うかなんと言うか、幸い宿の近くにはコンビニがあり(コピーが出来る)、観光スポットとしては星の王子さまミュージアムがあり(童話会にはぴったりでしょ？)、お風呂は温泉（これは当然狙いました）。一日目は星の王子さまミュージアム見学と合評会。二日目は湖の近くで船に乗ったり、ボートをこいだり。

一・二年生と存分に戯れる三男と、自分たちだけですっかりまとまってしまう三女。こういうところで性格の差がでるんだなあと苦笑していたら、一年生の男の子に「三女って四天王って感じですよね」とまで言われてしまう始末。この「四天王」、今でも健在です。四天王であることを盾に、日々もりもり生きています。

実をいうとこのころ、合宿の直前あたりに、パート員が増殖したので、ニューフェイスを交えて親睦を深めるという意味でも、よい機会だったのではないかと思います。

後期に入り、新たなるメンバーを加えての活動は、二年生に童話の森の編集を、一年生と三年生に紙芝居の製作を担当してもらい、別作

業ですすめてゆきました。

童話の森表紙の紙目の向きを間違えたり、紙芝居台紙の厚さを間違えたり、チーフとしてありえないミスを繰り返しながらもどうにか期日どおりに双方完成し、三田祭での公演、販売に間に合わせることが出来ました。

こんな頼りないわたしが一年間チーフを務められたのは、偏に同学年の四天王とロリコンズのみんな、そして三田で五時限目の授業をうけてから駆けつけてくれていたサブチーフの清水大輔氏のおかげです。彼らが支えてくれなかったら、二〇〇二年度の童話会は存在しなかったと断言できます。

本年度は岡本真由子ちゃんという、わたしなどより数倍、いや、数十倍しっかりしたチーフが、大所帯となった童話会をきりもりしています。何も出来なかったわたしが、ちょこちょこと顔を出すのは心苦しいし、迷惑を掛けていると思いつつも、童話会が本来あるべきすがたで、しっかりと活動しているのを覗くのが、いまいちばんの楽しみとなっています。

さいごに、二〇〇二年度のメンバーと活動日程を掲載して、活動報告とさせていただきたいとおもいます。

二〇〇二年度　活動報告

《前期活動》

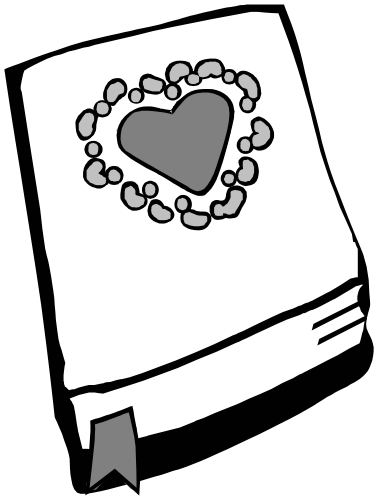
四月十日　担当：高橋志奈子　既成の話をつくりかえる
四月十七日　担当：阿部　優香　和洋童話
四月二十四日　担当：萩原　玲　ポスター作り
五月一日　ＧＷのためおやすみ
五月八日　担当：村松　壮介　ポンポコ村新聞
五月十五日　担当：入江　慶太　しりとり作文
五月二十二日　合評会
五月二十九日　読み聞かせ準備会①
六月五日　読み聞かせ準備会②
六月十二日　慶応義塾幼稚舎にて見学会兼打ち合わせ
六月十五日　慶応義塾幼稚舎にて読み聞かせ企画
六月十九日　反省会・印刷室講習
六月二十六日　担当：西川　和　３つのキーワードを使った話
七月三日　合評会（紙芝居の原作）
前期打ち上げ

《後期活動》

九月九日～十日　箱根にて合評会合宿

十月二日〜　紙芝居・童話の森製作開始
童話の森編集長　：岡本真由子
紙芝居絵描き責任者　：福田真理子
紙芝居シナリオ責任者：高橋志奈子
十一月二十一日〜二十四日　三田祭
十一月二十七日　三田祭疲れやすみ
十二月四日　担当：岡本真由子　色を使ってお話を作る
十二月十一日　担当：西川　和　しりとり作文
十二月十八日　二〇〇三年度チーフ選挙

二〇〇二年度　童話会パート員
三回生　入江慶太　佐藤真代　高橋志奈子
福田真理子　萩原　玲　村松壮介
二回生　阿部優香　岡本真由子　清水大輔
一回生　安部　徹　上野明子　白岩亮太
津田英佑　西川　和　原山朋子
廣澤勇也　町永千春　山田康雄
四回生　市原聡子先輩　西沢郁江先輩



2002年度童話会活動を通して

2年　上野　明子

童話会に入って早くも1年、「童話を書く」という今までなかった経験に、あれよあれよという間に月日が経っていました。初の体験ばかりの1年でしたが、振り返ってみて…そんな私なりの感想を少し発表してみたいと思います。

前期、主な活動は「即興作文」と「合評会」、「読み聞かせ企画」でした。担当の先輩の出すお題に基づいて、想像力を働かせて書いていく即興作文、体験で始めて書いたときは本当に緊張しました。普段書かない文を書いて、しかも他の人に見てもらうなんて…。なかなか手が動かなかったことを覚えています。けれど、荒削りの私の文章に対して、一生懸命に、温かく感想を書いてもらえたことが本当に嬉しかったです。

即興作文は、短時間にどれだけ想像を膨らませることができるか、そしてそれを文章にできるかが試されるんだと思います。ほんの僅かな時間しかない、と思って油断していると痛い目をみる…そんなことを密かに感じていました。だって、みんなすごい文章を書いているんですよ。思いつかないようなストーリー展開で責めてくる人、すばらしい描写で色彩豊かな世界を築く人、おちゃらけている中にも何かメッセージを含ませる人、繊細なガラスのような美しさを見せる人…。どうしてこんなに世界を広げられるんだろうって、いつも感動してしまうのです。毎回そんな感動を密かに求めて活動に参加していました。

即興作文や童話会の雰囲気に少し慣れてきた頃、合評会があり、さらに感動しました。これは、普段よりもずっと長い時間かけて熟成させた作品を、深く読みこんで評価しあうというものです。勝手もよくわからないまま、合評会に参加してびっくり！熟成時間が違うだけあって、出る意見も核心をついたものばかり。誉めるもあれば、改善点を熱心にいうもありで…少し緊張感の走るひとときでした。さすが童話会だな、と思いました。

慶応幼稚舎へ読み聞かせにも行きました。昨年までに作った紙芝居を片手に。子供と接する機会が少ない童話会、私は子供と上手く遊べるか、ちゃんと読んであげられるかが心配でたまりませんでした。当日は、はじめにちょっとしたレクをした後、紙芝居を1本、次に個々に分かれて1人のパート員に対して数人の子供を相手に本の読み聞かせ、最後に紙芝居をもう1本、という流れで行いました。子供達は、どぎまぎしているこちらを、率先して引っ張ってくれ、楽しい時間を過ごすことができました。楽しかったよ、ありがとう、という言葉が本当に嬉しかったです。私の反省は、もっと読み聞かせの練習をしておけばよかった、ということでした。

夏休み、2002年度は初の童話会合宿がありました。目的は、第二回合評会と、三田祭にむけての紙芝居の手直し。1泊2日で箱根へ、和気藹々と行きました。いつもと違う環境での活動は、新鮮で、けれど密度は濃くて、良かったなと思います。畳の部屋に集まって、みんなで円に

なって、距離も近くて。ふと思ったのは、同学年の作品に、作風が出てきたなということでした。といっても、私がそんなえらそうなことを言える立場ではないのですが…すみません。パート員同士もより親密な関係になれた、意義深い合宿だったのではないかと思います。

後期に入ってからは、童話の森と紙芝居の制作で毎週が忙しく過ぎていきました。童話の森は、2年の先輩方が中心となって、紙芝居は絵描き隊とシナリオ隊に分かれて、それぞれが楽しく且つ責任をもって制作していきました。私は絵描き隊でしたが、1枚の絵である程度の話しの展開を表現しなければならないので、どんな場面をメインに絵に表すかが難しいところだなと思いました。また、12枚の絵で配置や色が重ならない様に工夫するなど、些細なところにも気を配らなければならないところも新たな発見でした。そして、何とか三田祭前に完成、前日のリハーサルを迎える事が出来ました。出来あがった作品は、シナリオ隊のセンスのいい校正と、絵描き隊の温かみのある絵とで、本当にかわいらしいものになっていました。

当日、駄菓子テントと107にて子供を集めて紙芝居講演。私も1回読み手をやらせてもらいました。間の取り方、強弱や抑揚、声の大きさ…いろいろ迷い緊張しましたが、周りの方の協力のもと無事おわらせることができました。みんなで協力して作り上げた紙芝居、改善点もあったけど、本当にやりがいがあったと思います。そして同時に、出来あがった童話の森を読んで、改めて童話の面白さにわくわくしてしまいました。

昨年度の童話会活動を振り返ると、以上のような感じでした。理系で、文章嫌い・本嫌いの私が1年間童話会員として活動してこれたのは、童話に、そして童話会に不思議な魅力があったからだと思います。たった50個弱の文字の並びなのに、人によって全く違う雰囲気の作品が産まれてくる。同じ人間の脳なのに、人によって全く違うストーリーが産まれてくる。私達の書く童話は短いものが多いですが、そのなかに含まれるメッセージは本当に大きなもので…そんなこと全部をひっくるめて童話会の魅力なのだと思いました。もちろん、メンバー一人一人の存在も。昨年度の反省をいかして、今年も頑張っていきたいと思います。

文化財

２００２年度　文化財パート活動報告

こんにちは。２００２年度文化財パートチーフを務めさせていただきました、理工学部４年竹澤洋子です。早いもので、昨年発行された「機関誌 BON」で活動方針を書かせていただいてから１年が過ぎてしまいました。この１年間はこれまでの２年間と違い、文化財パートチーフとしての責任を強く感じる中で活動に取り組んできました。時には活動の楽しさを忘れてしまうほどに、「責任」という言葉に強く囚われていたと思います。しかし、どんな時でもパート員全員が文化財活動の重みを理解し、活動に真摯に取り組んでくれていました。その私たちの活動に対する思いが子供たちに通じたのか、どの公演を思い返してみてもたくさんの子供たちの笑顔が浮かんできます。これが、私たちの努力が実を結ぶ瞬間です。そして、次の活動に対するヤル気が盛り上がっていく瞬間でもあります。子供たちから笑顔がたくさんもらえた昨年度の活動は、「大成功」だったのではないでしょうか(昨年の BON で予告した通りです！)。

さて、昨年度の活動内容を、簡単ではありますがまとめさせていただきます。

☆２００２年度　夏キャラバン

９月２日～７日に渡って、茨城県鹿島郡旭村という、メロンの産地として有名な村で小学校４校を回らせていただきました。演目は、人形劇『モリスと不思議なガチョウ』(演出:宮崎美里)、影絵劇『モモ』(演出:申斐梨緒)です。どちらの公演も子供たちに大変好評で、ひと時の夢の世界を存分に楽しんでもらうことができました。また、子供たちと一緒に給食を食べたり、昼休みに校庭で走り回ったりしたことも、私たちにとっては大きな思い出です。

今回のキャラバンを行わせていただくにあたって、旭村教育委員会教育長である中村さんをはじめ、公演中ずっと私たちと共に行動し、サポートしてくださった教育委員会の川崎さん、また各小学校の先生方には大変お世話になりました。最終公演後には海辺で飲み会まで開いていただき・・・。例年に無く教育委員会の方々、小学校の先生方と触れ合う機会が多かったキャラバンとなりました。

最後に、夏キャラバン委員長として、パート員をまとめてくれた井上君に「お疲れさま、ありがとう」を。

☆三田祭公演

11月21日～24日に開催された三田祭では、きれいに飾りつけされた三田校舎107教室で、夏キャラバンのリメイク版を、人形劇４公演(演出:高橋利博)、影絵劇４公演(演出:山野辺俊一)

行わせていただきました。OBの方々をはじめ、慶應母親学生会の方や、公演先でお世話になった保護者の方、もちろんたくさんの子供たち・・・と、４日間を通して、夏キャラバンとは一味違った客層に囲まれる中行われた公演となりました。夏キャラバンに比べて制作期間がとても短い状態で完成させた劇ですが、どちらの劇もみなさんに楽しんでいただけたのではないかと思います。私たちの公演を観るためにわざわざ足を運んでくださったみなさんに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

☆矢上小公演

矢上小での公演も、毎年恒例になりつつあります。昨年は、12月１日にクリスマス企画として、矢上小学校の図書室をお借りして影絵劇を公演させていただきました。例年同様、図書室に入りきらないほどたくさんの子供たちが観に来てくれました。

☆たばさ公演

12月８日、軍畑パートのパート員と共に作り上げた企画のひとつとして、品川景徳学園で人形劇を公演させていただきました。劇公演という特殊な活動を行っているがために、他パートとのつながりが薄い文化財活動の中で、児研という枠を改めて見直すことの出来る企画となりました。子供たちの真剣に舞台を見つめる姿が、とても印象的でした。

☆たまごの会公演

2001年度の活動で初の試みとなった「たまごの会公演」。2001年度とは時期を変え、12月22日にクリスマス会の出し物として小舞公演を行わせていただきました。演目は『ゆきだるまのゆっきー』（演出:廣澤勇也）。クリスマス会当日は部屋の飾りつけから参加し、子供たちとの交流を深めることが出来ました。

以上の公演を、2002年度文化財活動として行わせていただきました。どの公演も印象深いものばかりで、強く心に残っています。これらの公演を、トラブルも無く、大成功で終えることが出来たのも、活動を実際に行っているパート員の頑張り、そして活動を応援してくださっているみなさんのおかげです。この場をお借りして深くお礼申し上げます。ありがとうございました。活動からは離れてしまいましたが、今年度も、さらにパワーアップした文化財を期待しています。がんばれ！

理工学部４年　　竹澤 洋子

文化財体験談

服部さくら

私は児研が、そして文化財が大好きである。

この一年間、文化財の活動が私の生活のペースを作っているのであって、睡眠時間も休日もそのスケジュールに従っていた。大学の講義も確かに聞いていた気もするが、明らかに部室と練習室にいた時間のほうが長い。

オリエンの何日目かに部室にお邪魔して以来一年と少し、児研には大変お世話になっている。なんて居心地のいい場所だろうか。行く場所がなくてうろうろしていた一年生の四月からは考えられない。

演劇を見るのが好きで、脚本を声に出して読むのが好きな私はすぐさま文化財の体験活動に参加した。びっくりした。先輩方は学年を超えて仲がよいのである。楽しそうで仲がよくて積み重ねた技術がある。なんだかよさそう。

こうして私は文化財に所属することになった。

初めは、子どもはどうでもいいと思っていた。

正確に言えば、子どものことなんて頭になかったのである。先輩がたが、子どもたちに伝わるように、子どもたちが楽しめるようにと劇作りに苦心していらっしゃるのを見て、実感がなかった。私の周りには小さな子なんていなかったし、もともとあまり得意ではなかった。むしろ嫌いなくらいだった。なので文化財に入ったのは楽しめそうだから、というのが一番にあって、小学校の芸術鑑賞という貴重な時間をいただいて子どもたちに劇を見てもらうという本格的で素晴らしい活動だとは露とも分かっていなかったのである。

八月に入って、本格的に劇の練習が始まった。劇は暗幕で光を遮って、出来るだけ暗いところで行なう。練習中も窓を隠して入り口のドアも閉めきって、真っ暗にしている。冷房はない。暑気がみっちりつまった練習室で朝十時から午後六時まで、ときには午後九時まで練習する。ものすごく暑い。たくさん水分を取る。ものすごく汗をかく。あいかわらずじっとり暑い。という世界でひと夏を過ごした。

影絵劇では、人形をダンボールや透明なアクリル板で作ったり、和紙の切り貼りで背景のスライドを作ったり、人形劇では、使う人形の服をミシンで縫ったり、大きな道具類を新聞紙から作り出したり、とパート員が分担作業する。すべてが手作りだ。小学校か中学校以来使っていない図工・工作の技術を総動員する。作り方は先輩方に聞きながら覚える。全員で集まって発声をしたり脚本を手直ししたりする。

たくさんの人間が、長い間ひとつのところに集まり、劇という同じ目標に向かって作業するうちには、なんとなくお互いの人と成りがわかってくるものである。例えば、あの人は細かい

作業が好きなんだな、とかこの人は脚本から新しくストーリーを考えるのが得意なんだな、とかいったものである。そういったことが分かってくるとますます楽しい。人間は大体どこかしらで自分の能力が発揮できるようになっている。それをお互い知って、認め合うことが出来るようになるのだと思う。いろんな個性が集まって出来あがった劇は、ひと夏のすべてがつまった本当に面白く、深いものになる。

九月の第一週目、大学ではまだまだ夏休み中だが、小学校では二学期の始まりである。この一週間に全力投球する。夏キャラバンである。私は、ここで初めて子どもたちの姿を見ることになった。人形劇にも影絵劇にもほとんどの子どもたちが聞き入ってくれていた。午前中に劇を見てくれた子ども達と給食を食べて、昼休みに一緒に遊ぶ。初めて教室に行った日は、どきどきしていた。子どもなんてどうしていいやらわからなかったからである。しかし、給食を食べ終わる頃には気がついた、別にそれほど特別な態度が必要なわけではないのである。いつのまにか子どもたちとも仲良くなり、「お姉さん」などと呼ばれたらなんとも可愛らしくなってしまって、半日も一緒にいないのに別れがたかった。最後に言われた言葉がとても嬉しかった。

「お姉さん達、来年も来る?」

キャラバンが終わった後、残ったのは充実感だった。ハードな練習日程や暑かった練習室や子どもたちと一緒に遊んだことすべてを含めて、楽しかったといえる。ここ最近で最も忙しく、精一杯に過ごした夏休みだった。今年も新学期がやってきて、新入生が文化財に所属しようとしている。彼らにも同じ、むしろ昨年よりもさらに充実した経験をして欲しい。それと同時に、私たち上級生はさらに知識や技術を吸収して活動にのぞみ、それらを後に残していきたいと思う。

私は子どもたちの顔を知った。作った劇を真剣に見入ってくれている顔、終わった後に感想を教えてくる顔、昼休みに遊びに誘ってくれる顔などなど。私たちはなんのためにひと夏かけて、劇を作り上げたかがわかった。子どもたちに何かを伝えたい。何かを伝えようと意識しなければ、それは伝わっていかない。自分たちが楽しんで劇を演じていなければ子どもたちも楽しいとは感じてくれない、ということでもある。今年ももうすぐ夏がやってくる。まためいっぱい楽しく力一杯劇にのめりこむだろう。でも今回は、自分の楽しみのためだけでなく、子どもたちの顔も思い描きながら、劇を作っていきたいと思う。

２００２年度

卒業生紹介

～２００２年度卒業生より～

石川 健太

オンリーワンを発掘した児童文化研究会での経験をいかし、今働いております日本綜合地所のマンション営業成績でナンバーワンになりたいと思っております。想像以上のマンションを売っていますので首都圏で新居を探しの際はぜひご一報くださいますよう（本社ダイヤルイン０３―５７８９―５２１６）石川までよろしくお願いします。

市原 聖子

あっというまの大学生活でしたが、振り返ると、いつもそこには「児研」があったような気がします。ここで出会えた人、経験できたこと、すべてに感謝の気持ちでいっぱいです。４年間、ありがとうございました。

稲見 優介

児研には５つのパートがあるけど、その各パートの中でも活動に対するアプローチの方法は無限だと思う。それが児研の良い所。みんなは自分の「色」に気づいていますか？自分の「色」を４年間で見つけて下さいね。

尾添 正裕

児研に入って、そしていくさばたの活動を続けました。活動では、多くのこと、人にまつわることを学ばせていただいた気がします。子供に長く接する機会も得ることができました。どうも、お世話になりました。

落合 友子

文学研究科一年に進学しました。相変わらず三田に通っているため、現役の方と遭遇することも度々あり、そんなちょっとした遭遇がうれしい日々です。現役の皆さんは児研を通しての一つ一つ出会いを楽しんでください

神戸 舞

在学中は大変お世話になりました。先輩、後輩、同学の皆に支えられて、おかげさまで悔いなく学生生活を終えることができました。特に新橋の活動に携わることができて本当に幸せでした。引き続き何卒宜しくお願い申し上げます。

栗田 紗弥

今年から公文を通じて子ども達に関わることになりました。児研の活動で培った経験を生かして頑張ります！児研の子ども達は優秀な後輩に任せました！

指方 朋子

私は現在、カタログギフトのリンベルという会社で働いています。学生の頃とはうって変わった規則正しい生活を送っていますが、児研でのことは今でもよく思い出します。今できることにしっかり向き合って、素敵な学生生活を送ってください。

田中 由美子

日々成長する子ども達と触れ合う活動は、毎回が新鮮に感じられ楽しくありました。しかしそれと同時に、子ども達の成長期に少しでも関わる活動ということで、責任の重要さについても多くを考えさせられ、学べる活動だったと思えます。活動を終えた今は、少しでも私と過ごした時間が子ども達にとって良い影響であればと思うことと、活動を支えてくれた仲間に感謝したいと思う気持ちでいっぱいです。

友田 那々美

私の部屋に、折り紙の（作った本人曰く）ウサギがあります。これは、子どもからプレゼントされたものです。きっとその子は覚えていないだろうけれど、私には絶対に捨てられないものです。児研の思い出が、そのウサギにつまっています。

西澤 郁江

先輩同期後輩の皆様には改めまして、色々お世話になりました。私は今ぎょうせいという出版社で企画編集の仕事をしています（といってもまだ新人ですが）。児研で学んだ様々な経験を今後の社会人生活に役立てていけたらと思います。これからもよろしくお願いします。

服部 未介

子供たちとふれあうことは楽しい。いっぱい、いっぱい笑った。ちょっぴり辛いときもあった。そして、じぶんはもう子供ではないと悟った。「オトナ」と「コドモ」のくべつなんて、ホントは誰にもわかりっこないのに・・・。

安本 佳世

いくさばた子ども会の活動では、何気ない人と人とのふれあいがどれほど大切か知りました。後輩、先輩、同輩にも恵まれ、本当に充実したサークル活動を送ることができました。大学生活、これなしには語れません。ありがとうございました。

編集後記

今年度のＢＯＮは昨年までと形式を代え、製本を行わずにＭＬでの配布、三田会ＨＰでの閲覧という形をとることにしました。

今まで、現役の、ＢＯＮを製作する側の考えとしては、「ＢＯＮはＯＢ基金をいただく代わりに、ＯＢの方のために作らなくてはならないものである」という認識であったと伺っています（語弊があったら申し訳ありません）。体裁を整えるために業者に印刷・製本を頼んで冊子にし、そこにかかった費用を埋めるために高額でＯＢの方々に販売する、という形式をとっていたために、双方に負担がかかった状態でありました。

また、高額であるということで、現役に販売することも難しく、実際ＢＯＮの存在を知る現役の数は少なかったと思われます。

このような状況をかえなくては、と気づいたのは、実はＯＢの方々でした。今回、ＯＢの方々が、ＢＯＮに対して疑問を投げかけ、また助言をくださったおかげで、私たちは改めて、ＢＯＮの存在意義について考える場をいただきました。

これまでのＢＯＮに目を通してみると、各年の児研員の方々の児研に対する、活動に対する熱い思い、その年の活動を振り返っての感想・反省など、さまざまな思いがこめられていました。先輩方の過去の貴重な経験談の詰まったＢＯＮ。これは多くの人に読んでもらうべきだと判断しました。

そして、ＢＯＮの主な目的は「児研員一人一人が、一年の活動を振り返り、次の年につなげていくためのものである」という結論にいたりました。そこで、現役全員に読んでもらうように、また見守ってくださっているＯＢの方々にも現在の児研の様子を知っていただくために、よりＯＰＥＮなＢＯＮを目指して今回のような形式をとることになったのでした。

今年度のＢＯＮも自ら製本してルームに一冊置き、各年のＢＯＮを手軽に読める状態にします。またＣＤ―ＲＯＭに毎年のＢＯＮの原稿を保存していきたいと思っています。

普段は５つのパートに分かれて活動している児童文化研究会。それゆえに所属していないパートの様子や活動内容を知る機会はなかなかありません。また過去の活動の様子を知ることもありません。

ＢＯＮを読むことによって、「児研員（ＯＢも現役も）」がこれまでの活動を振り返り、またこれからの活動をおこなう際の参考になれば幸いだな、と思います。

最後に、忙しいなか原稿を書いていただいた皆さん、ＢＯＮ作成を手伝ってくれた幹事長高橋くん、ＢＯＮに対して貴重なアドバイスをくださった先輩・只野会長・ＯＢの方々に、厚くお礼を申し上げます。

編集長　岡本　真由子